慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	メフメット・エミーン・レスールザーデ : ある民族主義者の生涯と著作
Sub Title	Mehmed Emin Resulzade : the life and writings of a nationalist
Author	石原, 賢一(Ishihara, Kenichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2005
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.1/2 (2005. 9) ,p.77- 102
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20050900-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メフメット・エミーン・レスールザーデ
――ある民族主義者の生涯と著作――

石原賢一

はじめに

メフメット・エミーン・レスールザーデが世界の各地に赴き、それと同時に数多くの著作を残した人物であるということはあまり知られていない。彼は母語であるアゼルバイジャン語はもちろんのこと、トルコ語、ロシア語、ペルシア語、ドイツ語、さらにフランス語で著作を残し、また帝政ロシア、イラン、トルコ、さらにはヨーロッパ各地に赴いている。

ところで、彼と同じく、帝政ロシア領アゼルバイジャンに生まれたアフメット・アーオウルという人物がいる。彼は後にアナトリアへ移住し、ジャーナリストとしてまた政治家として活躍し、多くの著作を残しているが、彼は自分の多作ぶりを「私が生涯に執筆した論文を一ヶ所に全部集めたならば、バクーからイスタンブルにまで伸びる広い道ができる」[1]とユーモアをまじえて語っているが、レスールザーデの場合はこの比ではないだろう。

レスールザーデについての研究は、早くも一九五〇年代にHostlerが彼の簡単なプロフィールを紹介している[2]。しかしその後、詳細な研究は行われてこなかった。その理由については、彼が活動した地域が世界各地に渡っており、資料へのアクセスが困難なこと、また彼の個人的な書庫が赤軍の侵入とともに破壊されてしまったことなどをバイカラは挙げている[3]。また、近年シムシルによってトルコ滞在期のレスールザーデの言動に関する研究が発表されたが[4]、アゼルバイジャンやイランでのレスールザーデの言動はほとんど考察されておらず、不十分なものと言わざるを得ない。

本稿は、網羅的にレスールザーデの著作を検討し、彼の思想や政治活動について綿密な考察を行うものではない。主たる目的は彼の生涯を整理するとともに、彼の著作の中から代表的なものをいくつか紹介し若干の考察を行うにとどまる。しかし、これは今後、彼の思想や政治活動について綿密な考察を行うための基礎作業となるであろう。

Ⅰ　レスールザーデの生涯[5]

(1)　社会主義の影響下で

レスールザーデは一八八四年一月三一日バクー近郊のノヴハヌの中程度のウラマーの家庭に生まれた。父の名はHacı Molla Ali Ekber Resulzade、母の名はZalkızı Ziynetという。初等教育は父のイスラーム式学校で受け、ここでペルシア語やアラビア語を学んだ。また、しばしば彼はロシア式学校で高等教育を受けたとされているが事実ではないようである。[6] 彼は高等教育を受けることなく、バクーのKaspiという印刷所で植字工として働き始めた。このときに様々な文献に触れたことが後に彼がジャーナリストとして活躍する礎となった。彼はまもなく、一九〇三年に当時チフリスで発行された『ロシアの東洋』(Şark-ı Rus) 紙に評論を書き送る。これが、彼のジャーナリズム活動の出発点である。

ジャーナリズムとの接点を得たレスールザーデは以後一九〇五年から一九〇八年にかけて様々な新聞や雑誌にかかわることになる。[7] このように彼が精力的にジャーナリズム活動をおこなえたのは、それまで厳しかったジャーナリズム活動に対する規制が第一次ロシア革命後、大きく緩和されたことが背景にあった。彼の活動はジャーナリズムの分野にとどまらず、政治活動にも及ぶ。一九〇四年に青年アゼルバイジャン人革命家委員会を創設し、さらに、同年秋にはバクーのムスリムの間に社会主義思想の浸透をはかるためにヒュンメトという組織を創設する。この頃、バクーのボリシェヴィキを率いていたスターリンとも親密な間柄になっている。[8]

しかし、このように比較的自由に政治活動が行える時期は長くは続かなかった。ストルイピンが首相になると政治活動やジャーナリズム活動に対する弾圧が再開されたからである。ヒュンメトもこの例外ではなかった。まもなく、ヒュンメトのメンバーは次々と逮捕され、なかには逮捕を逃れるためにイランへ亡命した者もあったと

いう。

この頃、レスールザーデはイランへ行く。このイラン行きをロシア政府の弾圧から逃れるためとみる向きもあるが[9]、あくまで立憲革命取材のためにイランへ行ったととらえたい。それは、この時期彼は二度イランに来訪しているとともに、『進歩』(Tereqqi) 紙に数多くの記事を書き送っているからである[10]。最初の来訪は一九〇八年の夏であった。これはタブリーズ蜂起の状況を取材するために同地に赴いたのであり、滞在期間は数週間程度で、行動範囲もタブリーズとその周辺にとどまったものと思われる。

それに対して、一九〇九年の二度目のイラン来訪では、その後二年近くイランに滞在するとともに、行動範囲もラシュト、タブリーズ、オルミーイェ、ジョルファ、テヘランといったようにイラン各地にわたっている。また、これまでレスールザーデのイラン来訪については一九〇八年であるとか、一九〇九年であると言われてきたが[11]、いま述べたことから分かるように、いずれも正確ではない。

ところで、第二次立憲制が開始すると、レスールザーデはイランの政治に深くかかわることになる。それは、一九〇九年八月に創刊されるデモクラート党の機関紙『新イラン』の編集者になったからである。イラン国外からやって来た彼のような人物がこのような新聞の編集者となったのはどうしてだろうか。おそらく、デモクラート党の指導者であるタギーザーデと親しくなったことや、ジャーナリストとしての豊富な経験を買われたことがその背景にあるのだろう。

いずれにせよ、以後、彼はデモクラート党の代弁者として国民議会における議論を民衆に伝えるとともに、一九一〇年一〇月には保守派のエテダーリユーン党に対する批判を綴った小冊子『エテダーリユーン党批判』を出版するにいたる。しかし、一九一一年初頭、親英国派のナーセロル・モルクが帰国して摂政に就任すると、エテダーリユーン党と連携したこの人物によってイランから追放されることになった。

こうしてイスタンブルに亡命してきたレスールザーデは当時、同地でタタール人のユスフ・アクチュラらが創刊したパン・トルコ主義系誌『トルコ人の母国』(Türk Yurdu) や、『正しい道』(Sebilürreşad) 誌にイランに関する論文を寄せている。この時期における彼の活動で特に触れておかなければならないのは、パン・イスラー

ム主義者として名高いアフガーニーの著作『同一性哲学』（Vahdet-i Cinsiye Felsefesi）をペルシア語からトルコ語に翻訳し、『トルコ人の母国』に掲載したことであろう。[12]

また、彼はゴーリキーやトルストイの作品を翻訳した『ロシア文学作品抄』を出版している。このことからプロレタリア文学に関心を抱いていたとして、この時期も含め、バクーに戻ってからも依然として彼は社会主義に惹かれていたとシムシルは主張しているが、[13]この言い分は無理があるだろう。

なぜならば、レスールザーデは後年、アゼルバイジャン文学に関する講演を行ったり、ニザーミーの作品を紹介した大部の著作を発表するなど、彼は文学全般に対して終生関心を持ち続けていたと考えられるからである。[14]また、この時期イスタンブルにいながらバクーにいる同志たちと連絡を取り、社会主義系のヒュンメトとは異なった組織を創設する動きも見せていた。[15]このように、亡命先のイスタンブルで様々な活動を行っていたレスールザーデであったが、一九一三年、ロマノフ朝建国三百周年を祝して恩赦が発せられ、バクーに戻ることになる。

（2）民族主義運動のリーダーとして

バクーに戻ったレスールザーデは治安警察の注意を引かぬよう、しばらく商店に務めた後、イスタンブル滞在中に創設された民族主義政党ミュサヴァトに加入した。後年、アゼルバイジャンを代表する政党となるミュサヴァトである。レスールザーデは一九一七年に開催された第一回ミュサヴァト党大会で党首に選出される。以後、彼は亡くなるまで党首の地位にあった。

また、まもなくジャーナリズム活動も再開した。この時期の彼のジャーナリズム活動の中で特筆すべきは、『シェラーレ』誌上で行われた言語論争であろう。当時、アゼルバイジャンのジャーナリズム界においてオスマン語で執筆するか、それともアゼルバイジャン語で執筆するかをめぐって論争が行われていた。地元のアゼルバイジャン人ジャーナリストたちは後者の支持者であり、シェラーレを発行していたアナトリア出身のSabri Beyzadeは前者の支持者であった。

レスールザーデは人々を結束させる力をもつ言語の社会的役割を重視し、地域閉鎖的なアゼルバイジャン語と難解なオスマン語のいずれも支持しなかった。彼はシェラーレ誌上において簡明な書き言葉のトルコ語（orta

edebi Türkçe）での執筆を推奨し、それを一九一五年に自ら創設した『明瞭な言葉』紙で実践したのである。[16]

また、レスールザーデはこの時期、『ディリリキ』誌（一九一四―一九一六）に発表した論文の中で民族（millet）の定義を行っている。彼は、民族とは宗教の共通性（din birliği）ではなく、言語と文化の共通性（dil ve kültür birliği）に依拠しており、ムスリムであることは民族ではなく宗教的な集合体であるウンマ（の一員であること）を意味すると簡明に説明している。より具体的には、民族とは、その言語、宗教、歴史、慣習、風習、伝統を一にする人々の集合体であるとし、地理的あるいは政治的または経済的観点から捉えようとする一面的で偏狭な見方を斥けている。[17]

さて、一九一七年にロシア革命が発生すると、当然、ロシア領内のトルコ系の人々にも大きな衝撃を与えた。早くも、二月革命からまだ間もない四月にバクーのイスマイル宮殿でカフカース・ムスリム大会が開催され、レスールザーデも参加している。さらに、五月にはモスクワで全ロシア・ムスリム大会が開催され、レスールザーデは積極的に発言し、連邦主義者としての立場をとったのであった。[18]

ところで、ザカフカースでは十月革命後の十一月にはアゼルバイジャン人、グルジア人、アルメニア人の代表者からなるザカフカース委員部（Mavera-yi Kafkas Komiserliği）が暫定的な統治機能を果たすことになる。そして、ザカフカース委員部は一九一八年二月に各民族から選出された議員で構成されるセイムに権限を委譲し、セイムは四月にロシアからの独立を宣言するにいたる。レスールザーデはザカフカース委員部におけるムスリム・フラクションの代表という重責を負うことになる。ちなみに、この地位は後にアゼルバイジャンで形成される国民評議会議長（Şura-yi Milli reisi）の地位に引き継がれることになる。

この時期のレスールザーデの主張は、アゼルバイジャン、グルジア、アルメニア、北カフカースからなる連邦（konfederasyon）を形成すべきというものであり、この主張は一九一八年五月にドイツの圧力により、セイムが解体した後も続いた。[19]

セイムが解体すると、セイムのアゼルバイジャン選出議員たちは国民評議会を形成し、五月二八日国民評議会はアゼルバイジャンの独立を宣言した。国民評議会の最初の重要な任務はオスマン朝との交渉であった。国民評

議会議長としてレスールザーデは五月から六月にかけてバトゥームでオスマン朝代表と交渉を行い、アゼルバイジャンの独立の承認と支援部隊派遣の約束を取りつけることに成功する。そして、オスマン軍の支援を受けて九月一五日、ボリシェヴィキの占領下にあったバクーの奪回を達成した。

実は、このときレスールザーデはイスタンブルにいた。これは、ヨーロッパ諸国が参加して開催される予定の国際会議に出席するために他のザカフカース諸国の代表団らとともにイスタンブルに派遣されていたからである。ちょうど、この時期、ベルリンにおいてドイツとソヴィエト・ロシアとの間で結ばれた秘密協定[20]に対して、レスールザーデはイスタンブルの新聞に告発文を載せるとともに、関係各国の大使館に抗議文書を送付している。

まもなく、レスールザーデは十月下旬バクーに戻る。国民評議会は議会（parlamento）を召集することを決定する。一二月七日に行われた議会の開会式でのレスールザーデの「一度昇った旗は二度と降ろされることはない」という演説はあまりにも有名である。しかし、ようやく軌道に乗り始めたアゼルバイジャンもその独立は長く続かなかった。それまで、カフカースを脅かしていたデニキン率いる白軍に代わって新たにやってきた赤軍の侵攻を受け、一九二〇年四月二七日アゼルバイジャン共和国の独立は終焉した。

レスールザーデは赤軍の追っ手から逃れるために、バクーを離れ、シャマフ近郊のラヒチに身を潜める。追跡をかわすためにラヒチの家々を転々としていたレスールザーデはこの時期、『シャーナーメ』の中のスィヤーヴシュ・デスタンに感銘を受け、『現代のスィヤーヴシュ』（Asrımızın Siyavuş'u）という異色の作品を残している。まもなく、レスールザーデは発見され、バクーに連行され収監された。

（3）祖国解放を求めて

レスールザーデはバクーのAsabi Atel刑務所に収監されていたところ、旧知のスターリンが彼に面会を求めてきた。スターリンのはからいで彼は釈放され、スターリンとともに列車でモスクワへ行き、そこで軟禁生活を送ることになった（一九二一年）。

この間、東洋諸言語研究所でトルコ語とペルシア語の教師として勤務した。バクーから友人がやって来て、国外で祖国解放運動をするように勧められる。レスールザ

ーデは研究調査の名目で許可をもらい、レニーングラードへ行く。そこから舟でフィンランドへ逃亡する計画を立て、タタール人のムーサー・ベギイェフ[21]の支援を受け、フィンランドへの脱出に成功する。ヘルシンキでタタール人居住区に一ヶ月ほど滞在した後、ベルリンそしてパリを経由してイスタンブルにたどり着いた（一九二二年）。

イスタンブルにやって来たレスールザーデは早速、祖国の啓蒙とソヴィエト体制批判を行うべく、出版活動に精力的に取り組んだ。一九二二年に『アゼルバイジャン共和国』を、翌年には以前ラヒチで執筆した『現代のスィヤーヴシュ』を出版する。一九二三年九月、対ソヴィエト闘争のプロパガンダ誌として『新カフカース』（Yeni Kafkasya）を創刊したが、その過激なソヴィエト・ロシア批判のためにソヴィエト政府の圧力を受けて一九二七年一〇月廃刊に追い込まれた。

その後、一九二八年二月、雑誌『アゼルバイジャン・トルコ人』（Azeri Türk）を創刊した（一九三〇年二月まで発行）。また同年、ユスフ・アクチュラが中心となって刊行された『トルコ人の年一九二八』（Türk Yili 1928）でアゼルバイジャンの部分を担当し同書に「カフカースのトルコ人たち」（Kafkasya Türkleri）という論文を寄せた。その後、一九二九年三月、雑誌『火中の母国』（Odlu Yurt）を創刊した。

ところで、レスールザーデはこの時期、ロシア領内からイスタンブルに亡命してきた他のトルコ系の人々とも接触を行っている。例えば、一九二五年五月にはヨーロッパからイスタンブルにやって来たばかりのバシキール人ゼキ・ヴェリディ・トガンと夜を徹して語り合っている。また、アゼルバイジャン人のお茶会に招かれたトガンはそこで演説を行っている。[22]

しかし、まもなく、ソヴィエト・ロシアに対する一連の抵抗運動を懸念したソヴィエト政府がトルコ政府に圧力をかけ、レスールザーデはイスタンブルを離れなければならなくなった（一九二九年頃）。以後、一九四七年に再びトルコに戻ってくるまでレスールザーデはヨーロッパ各地で祖国解放運動を続けることになる。

ヨーロッパに来てからもレスールザーデのジャーナリズムを駆使した祖国解放運動は続いた。亡命ロシア被支配民族の組織プロメテウスによってパリで発行されていた雑誌『プロメテウス』（Prométhée）に一九二八年から一九三九年にかけて論文を寄せている。また、ベルリ

ンで発行されていた雑誌『解放』(Kurtuluş) に一九三五年から一九三九年にかけて論文を書いている。さらに、この頃ヨーロッパで発行されていたミュサヴァト党の機関誌『ミュサヴァト報』(Müsavat Bülteni) にも多くの論文を執筆した。

一九三四年から一九四三年まで彼の活動の拠点はワルシャワであった。ワルシャワではポーランド政府の顧問を務めたり、著書『アゼルバイジャン現代文学』(Çağdaş Azerbaycan Edebiyatı) を刊行するなど多彩な活動を行っている。この時期の彼の動きで特に気になるのはナチスとの接触である。一九四二年にナチス外相 Von Schulenburg の招きでレスールザーデはベルリンにやって来た。対ソ戦におけるコーカサス戦線での協力を要請されたが両者は合意にいたらず、交渉は決裂に終わった。

ワルシャワを活動の拠点としていたレスールザーデであったが、一九四三年にここが赤軍に占領されると、ブカレストに移る。しかし、ここにもまもなく赤軍が侵攻してくるとスイスへ渡ることを希望した。しかしヴィザが取れず、フライブルクに移り住んだ。

ヨーロッパ各地を転々としていたレスールザーデは、一九四七年九月トルコに戻ってくる。以後アンカラが彼の亡くなるまで安住の地となった。アンカラではまず文部省出版局 (Milli Eğitim Bakanlığı Yayım Müdürlüğü) に、それから国立図書館に勤務した。アゼルバイジャン語の書物の文献目録を作成するなどの業務に携わっていたようである。

一九四九年にはアゼルバイジャン国民センター (Azerbaycan Milli Merkezi) の主導でアゼルバイジャン文化協会 (Azerbaycan Kültür Derneği) が設立され、レスールザーデは名誉会長に推されるとともに、一九五二年、同協会によって雑誌『Azerbaycan』が創刊されると多くの論文を執筆し、彼の精力的な活動は晩年まで衰えることはなかった。一九五五年三月、長年患っていた糖尿病が悪化し、亡くなった。

Ⅱ　レスールザーデの著作

前述したようにレスールザーデはその七十一年の生涯の間に多くの著作を残している。その全てをここで紹介することはできない。ここでは、彼の青年期、壮年期、老年期の著作の中から代表的なものをそれぞれ一つずつ紹介することにしたい。これによって、彼の思想や人と

なりの一端を提示することにしよう。

1．『イランのトルコ人たち』（İran Türkleri）[23]

レスールザーデはイスタンブルで発行されていた雑誌『トルコ人の母国』に一九一二年に六回にわたって論文を連載している。その論文の主題がこの「イランのトルコ人たち」である。その第一回目の論文の中で「その目的と任務をトルコ人たちの利益のために活動する『トルコ人の母国』の求めに応じて」[24]この執筆を引き受けたことを明らかにしており、当時、オスマン朝内でほとんど知られることのないイランのトルコ系の人々の情報を提供することを意図して執筆されたことがわかる。

前述したように、レスールザーデはイラン立憲革命に直接的また間接的にかかわった。この著作から彼のイラン認識やイランに関する知識の程度について知ることができる。それが、本書を紹介する理由である。以下、この六本の論文の内容について順次紹介していくことにしたい。

（1）イランのトルコ人たち　一

ここでは、イランのトルコ人たちに関する地理的情報が紹介されている。例えば、イランの人口に関して言及しているが、彼によると、イランの人々の間ではその人口は一五〇〇万人程と考えられている。しかし、レスールザーデはこの数字を誇張であると考えており、外国の地理学者たちがあげる一〇〇〇万人弱という数字を支持している。そして、仮にその人口が九〇〇万人であるとすると、その三分の一にあたる三百万人がトルコ系の人たちであるとしている。

それから、イラン・アゼルバイジャンの地理的説明に移る。アゼルバイジャンの山地は鉱物資源が豊富であるが、充分に利用されていないという。例えば、Karadağは銅が豊富だが、モザッファロッディーン・シャーがその利権をロシアに譲り渡してしまったことを紹介している。また、アゼルバイジャンの諸都市では皮なめし業や紡績業、絨毯業、鍛冶屋、建築業などの産業があると述べている。そして最後に、ガシュガーイーやトルクメンといったイラン領内のトルコ系部族について簡単に紹介している。

（2）イランのトルコ人たち　二

ここでは、アゼルバイジャンの社会的状況について述

べる。著者によるとアゼルバイジャンで農地が不足しているのには三つの理由があるという。まずは、人口密度が高いことがあげられている。面積はイラン全土の二十分の一であるのに、全人口の四分の一がアゼルバイジャンに集中しているという。次に、水不足をあげている。そして、三つ目は土地の多くが大チフトリキという形で少数の地主によって独占的に所有されていることをあげている。

さらに、レスールザーデは耕作地を次の三つに分類している。まずは国有地（Halise）である。彼によると、ここで耕作する者は五四平方メートルあたり二トマーンの税を支払っているという。二つ目は大チフトリキ（Erbabi）である。ここでは、湿地の場合には収穫物のうちチフトリキ所有者が提供した種子の半分が還付された後、残った収穫物の三分の一が耕作人の取り分になるという。乾燥地の場合には収穫物の四分の一、六分の一、または八分の一が耕作人の取り分になるという。そして、三つ目は農夫が自ら所有する土地（Hurdamalik）である。

ここで例示した税負担はイラン全土での平均的な数字を挙げたものであって、アゼルバイジャン地方では必ずしもこの範囲にとどまらないという。例えば、シャーサヴァン族やマクー・ハンが支配する地域では村民は重い負担を強いられていたという。そのため、この地域における立憲革命の過熱ぶりはすごいものがあり、村民は武器を手にとり立ち上がったことを著者は紹介している。

また、アゼルバイジャンの人々の出稼ぎについても触れている。苦しい生活の中、糊口をしのぐために毎年、故郷を離れ、イスタンブルまたロシア領内のバクーやアストラハンなどに出稼ぎに行くものがたくさんいるという。また、ハルハル近郊からギーラーン地方に出稼ぎに行き、稲作に従事するというように国内のカスピ海沿岸地方に出稼ぎに行く者も多いという。

さらに、アゼルバイジャンの人々の商才についても触れている。タブリーズはイラン最大の商業の中心地であり、アゼルバイジャン商人はイラン商人の中で先導的な位置を占めているという。また、小さな店舗から大きな商店にまで発展させた者も多く、今日ではアメリカ、イギリス、ベルリンなど世界各国でアゼルバイジャン出身の資本家を目にすることができるという。

（3）イランのトルコ人たち　三

ここでは、イラン・トルコ人の政治的状況について述べられている。五百年来、カージャール朝を含めてイランではトルコ系の支配者が君臨しているが、ペルシア人たち（Farslar）はこの支配者を崇拝しているという。イランではガシュガーイー族以外のトルコ人の大半がシーア派を信仰し、ペルシア化しているために自分たちをトルコ化したペルシア人つまり、土着のイラン人（aslen İranlı）と認識しているという。また、イラン・トルコ人は精神的にはペルシアの影響に屈しているが、物質的、例えば軍事的には将校の多くがトルコ系というように重要な地位を占めているという。

また、カージャール朝において西洋化を推進した人物として一九世紀前半に活躍した皇太子アッバース・ミールザーをレスールザーデは評価している。それは、彼が西洋式軍隊を創設し、それに合わせてイギリスから将校を招いただけではなく、印刷所を建設するというようにイラン発展のための数々の良策を行っているからである。そして、もしイランがロシアに戦争で負けるようなことがなかったら、イランの政治は違った結果になったとまで言い切っている。

さらに近年、イランではトルコ系の外交官が増加しているという。大使や領事といった在外公館長の多くがトルコ系であり、特にカフカース地方やオスマン朝にはトルコ系の外交官が派遣されるという。そして、イランとオスマン朝との間で外交関係が成立して以来、一、二の例外を除いて全てトルコ系の者が大使に任命されているという。

（4）イランのトルコ人たち　四

ここでは、イラン・トルコ人たちの立憲革命との関わりについて述べられている。レスールザーデはイランの自由主義運動で重要な役割を果たした集団として、諸外国とパイプをもつ商人、外国に出稼ぎに行き故郷に帰って来た村人、国内外の学校で教育を受けた知識人という三つの集団をあげている。

アゼルバイジャンはイランの中でも先進国に最も近い地域であり、アゼルバイジャン商人はロシアやイスタンブルやヨーロッパに頻繁に行き来し、現地の実情をよく観察しているという。また、カフカースやロシア内地に出稼ぎに行ったものは、その地の労働運動に感化され、革命思想を携えて戻ってくるという。さらに、外国で教

育を受けた若者の多くは北イラン出身者であり、またテヘランで中等教育や高等教育を受けるものたちの中でもトルコ人が少なくないという。

また、イランの民衆を啓蒙したトルコ人として、イスタンブルでアフタル紙を発行していたモハンマド・ターヘル、『アフマドの書』を執筆したアブドッラヒーム・ターレボフ、そして『エブラーヒーム・ベクの冒険』を書いたゼイノルアーベディーン・マラーゲイーの三人をあげている。(25)

レスールザーデは興味深いことにイランの自由主義思想に影響を与えた地としてイスタンブルとバクーをあげている。とくに、バクーでは第一次ロシア革命と社会主義運動の影響受けて、イラン社会民主党が形成され、その支部がイランにも設けられたことを紹介している。そして、そのメンバーの大半はトルコ人であり、テヘランで最初に爆弾を爆破させたのはこの組織のメンバーであるという。また、モハンマド・アリー・シャーによって議会が閉鎖された後もタブリーズ、ホラーサーン、ラシュトで革命運動に貢献し、戦闘員や銃器、弾薬などを補給していたという。

そして、話は第二次立憲期に移り、デモクラート党とエテダーリユーン党の二党について言及した後、デモクラート党の主張を代弁していた新聞として彼自ら編集者として携わった『新イラン』紙にも触れている。この新聞はイランで最初の日刊紙であり、イランで最も読まれた新聞であるという。そして、この新聞の執筆者はアゼリー・トルコ人たちであったと述べている。

レスールザーデは最後に誤解のないように次の点を指摘している。トルコ人革命家、トルコ人議員、トルコ人アンジョマンという言葉を聞いて、彼らがトルコ主義に立脚して行動していると考えてはいけないと断っている。彼らはトルコ主義ではなく、イラン主義、祖国の統一のために奮闘しているのだという。

(5) イランのトルコ人たち　五

ここではイラン・トルコ文学について述べられている。まず、著者はアゼルバイジャンにおける書き言葉としてのペルシア語の優位性について具体例をあげて説明する。彼によると、イランでは教育は全てペルシア語であり、ペルシア語の読み書きができる人でもトルコ語を読むのは苦手であるという。

また、都市で働く文盲である地方出身者が故郷に手紙

を送る場合には、代筆屋にたのんでペルシア語で手紙を書いてもらう。受け取った故郷の人はというと村のイマームに手紙を読んでもらい内容を教えてもらうという。したがって、レスールザーデはイランにおいては宗教語としてのアラビア語とならんで書き言葉としてのペルシア語の権威が確立していると述べている。

しかし、話はそう単純ではないようである。書き言葉としてのペルシア語はアゼリー上流階級（havass）には受け入れられているが、一般民衆（avam）には受け入れられていないと彼は指摘し、民衆の間にトルコ文学といえるものが存在するとしている。そして、トルコ文学を「キョルオウル」のように吟遊詩人（aşık）たちによって詠われる説話や歌謡と、書写された詩の二つに分類している。また、トルコ語の新聞についても紹介している。タブリーズで発行されていた新聞『談笑』（Sohbet）はイラン最初のトルコ語新聞であり、民衆が理解できるような言葉で書かれていたという。また、これより先にオルミーイェで発行された半ペルシア語、半トルコ語の新聞『悲鳴』（Feryad）についても紹介している。

最後に、レスールザーデは以前、イスタンブルである退役将校と話をしたときに自分がアゼルバイジャン・トルコ人であると名乗ると、彼がオスマン朝国外にトルコ人が存在することを知って驚いたというエピソードを紹介している。そして、この読者の大半がイランに固有のトルコ文学が存在するということをこれを読んで始めて知るだろうと述べている。

（6）イランのトルコ人たち　六

ここではガシュガーイー族について述べられている。シーラーズ周辺におり、三五万人ほどいるというこの部族は八つの小部族（taife）に分かれており、この小部族をKelanterと呼ばれる小部族長が率いている。そして、この各小部族をİlhaniと呼ばれる部族長が統率しており、彼は小部族長の任免権を有しているという。ちなみに、部族長の任免権はシャーが持っている。

この部族長は毎年ノウルーズのお祭りの際には部族の者から七、八万匹もの羊が贈られるのでイラン南部最大の富裕者であるという。遊牧民でもあるガシュガーイーは冬の間、ガシュガーイーの農夫（Kaşkai raïyyeti）とよばれる者に夏営地の畑を任せている。この者たちはガシュガーイーの威光を笠に平和裏に暮らしているという。

また、ガシュガーイーの情報網についても触れている。各小部族長は日々の出来事を文書の形で部族長と他の小部族長に報告している。また、部族長はテヘランなどの重要都市に家臣を常駐させ、常時報告を受けているという。ガシュガーイーの女性にも話は及んでいる。ガシュガーイーの女性はベールを身につけておらず、そればかりか男性とともに集会に参加し、また客をもてなすのは彼女たちの役割であるという。また、彼女たちが織る絨毯はヨーロッパの刺繍とは異なった独自の刺繍がなされており、その品質の高さから一枚八〇から一〇〇トマーンで売買されているという。

最後にガシュガーイー族と並んでイラン南部の代表的な部族であるバフティヤーリー族との不仲についても言及している。両部族の間では土地の帰属をめぐる問題があり、たびたび戦闘が行われているという。そして、敵対するバフティヤーリー族が立憲制を支持していることがガシュガーイー族の立憲制に不信感を抱く根本的な理由だと述べている。

2.『カフカースのトルコ人たち』[26] (Kafkasya Türkleri)

ユスフ・アクチュラが中心となって一九二八年、トルコ世界に関する年鑑ともいうべき『トルコ人の年一九二八』が出版された。アクチュラがカフカース・トルコ世界に関する部分の執筆をレスールザーデに依頼して書かれたのが本書である。本書は『トルコ人の年一九二八』の四七四ページから五五二ページに収録されている。

この「カフカースのトルコ人たち」は、帝政ロシアの支配下に入るまでの時期を扱った「第一章：歴史への視点」、帝政ロシアの支配下に入ってから一九一八年五月にアゼルバイジャンが独立するまでの時期を扱った「第二章：ロシア支配下の百年」、一九一八年五月から一九二〇年四月までの約二年間にわたるアゼルバイジャンの独立期を扱った「第三章：アゼルバイジャン共和国」、そして、一般にほとんど知られていないダゲスタンの情報を扱っている「第四章：ダゲスタン共和国」の全四章から構成されている。

本書から、近代カフカースの概要をとらえることができるとともに、自ら生きたこの時代をレスールザーデが

どのように認識していたのか知ることができる。それが、本書を紹介する理由である。ここでは、近代アゼルバイジャンの部分に該当する第二章と第三章について紹介することにする。

（1）第二章について

第二章は五節からなる。第一節では東カフカースにおける帝政ロシアの政策について述べる。帝政ロシア支配後もハンによる支配がしばらくの間、認められたが、ダゲスタンで反乱が起きたことを契機として、新たにベイと呼ばれる者をハンに代わる地方支配者に据える政策が行われたとする。[27] ベイは当初、徴税権のみを有していたが、しだいに土地の所有も認められたという。また、東カフカースでは一九一二年まで村民がベイから土地を購入することができなかったとし、このためアゼルバイジャンの社会経済の発展が妨げられたと主張している。

また、ロシア支配下での宗教組織についても言及している。シーア派をシェイヒュル・イスラームに、スンニ派をミュフテュに統括させることで宗派の違いを煽り、民族意識の覚醒と民族の一体性を妨げる政策がとられたとしている。また、ロシア政府の子飼いのモッラーを民衆は「文書の上でのモッラー」（defter mollası）と呼び、敬意を払うことがなかったという話を紹介している。

第二節では近代アゼルバイジャン文学について述べられている。一九世紀半ば以降、劇作家として有名なアーフンドザーデの流れを汲んでアゼルバイジャンで演劇が隆盛したと述べる。しかし、詩の隆盛については一九〇五年革命まで待たねばならなかったという。続く、第三節で一九〇五年革命後に活躍した詩人の具体例として『モッラー・ナスレッディーン』誌に「ホプホプナーメ」を執筆したサービルをフズリーと並ぶ詩人として高く評価している。

また、ジャーナリズムについても言及し、アフメット・ケマルのような青年トルコ人を執筆者にむかえたことによって、『恩恵』（Füyuzat）誌がアゼルバイジャン・トルコ語の西洋化に影響を与えたと述べるとともに、風刺誌として知られる『モッラー・ナスレッディーン』誌を模倣した多くの定期刊行物が刊行されたが、その人気で『モッラー・ナスレッディーン』誌に及ぶべくもなかったとしている。

第四節ではカフカース・トルコ人の政治思想について述べている。一九〇五年革命まではカフカースばかりで

なく、全ロシアにおいてパン・イスラーム主義が政治思想の中心であったが、その後、民族主義思想が台頭し、この傾向を決定づけたのがバルカン戦争であると指摘する。第五節では一九一七年のロシア革命期のカフカースの状況が述べられている。チフリスのザカフカース委員部とバクーのバクー・ソヴィエトの確執が描かれている。

（2）第三章について

第三章は十六節から構成されている。最初の三節では読者の理解を助けることを意図して、アゼルバイジャンの名称の由来、地理的情報、経済的情報が紹介されている。第四節では一九一八年五月二八日にアゼルバイジャンが独立を宣言した後に行われたオスマン朝との交渉について述べている。この交渉でオスマン朝から支援軍の派遣の約束をとりつけたが、ドイツと手を組んだグルジアが進路を妨げたために援軍の到着が遅れたとしている。

第五節ではゲンジェに開設されていた国民評議会が休会した理由が述べられている。国家の統治のあり方をめぐって、民主主義志向者と封建主義志向者の対立があったとし、国家の非常事態に終止符を打つべくFethali Hanに組閣を命じて国民評議会は休会することになったという。

第六節ではバクー奪回の様子が述べられている。バクー・ソヴィエトが瓦解した後、新たにバクーの支配権を握った「ツェントロカスピとソヴィエト執行委員会の独裁」（Direktuar）がイランに駐屯するイギリス軍を呼び寄せ、状況は緊迫したが、ヌリ・パシャ率いるオスマン軍の活躍でバクーの奪回が達成されたとしている。

第七節ではムドロス協定の規定に従って、オスマン軍がアゼルバイジャンから撤退した後の様子が描かれている。第八節では一九一八年一二月に開設された国民議会について述べられている。国民議会は国民評議会によって一一月に制定された国民議会開設基本法に基づいて開設され、議員数は一二〇名とされたが、実際に選出されたのは九三名であったという。民族別また政党別の議員の内訳についても紹介している。

以下、彼の記述に従って各政党の性格について紹介する。第一党であるミュサヴァト党は社会的観点からは急進的であり、また民主主義を標榜していた。教育については中高等教育ではイスタンブル方言が採用されるべきであると主張していた。民主主義的知識人や労働者などが支持者であった。第二党の統一党（İttihad Fırkası）

はパン・イスラーム主義を標榜し、土地の問題についてはシャリーアにしたがって解決されるべきであると主張していた。また、封建領主たちが支持者であった。同じく、第二党の社会主義者会派（Sosyalist Bloku）は社会民主主義者やボリシェヴィキから構成されていた。中立グループ（Bi-Taraf Grup）はロシア学校で高等教育をうけた知識人や大ブルジョアによって構成され、政治路線はミュサヴァトと近かった。

第九節ではバクーに上陸したトムソン率いるイギリス軍の威光を笠に、ロシアがアゼルバイジャンに揺さぶりをかけていた様子が描かれている。ロシア人とアルメニア人によって発電所を含めたストライキが行われるという非常事態が発生したが、ミュサヴァト党が労働者を組織したことで、この難を逃れることができたとしている。

第十節では独立期にアゼルバイジャン政府が行った施策と外交関係について紹介している。軍隊については陸海空の軍隊の編成と軍事学校が設立されたこと、領土をめぐる問題についてはアルメニアにカラバフの帰属を認めさせたこと、アルメニアと交戦中のナヒチェヴァンに物資を送るとともに知事を派遣し支配を確立させたことなどが述べられている。経済財政政策については革命中に破壊された油田を復旧させたことや国立銀行を設立したこと、教育政策については男子と女子の各師範学校を設立したこと、政府の奨学金で多数の学生がヨーロッパに留学したこと、トルコから五〇名あまりの教師を招致したことなどが述べられている。外交関係については、ロシアの脅威に備えるためにグルジアとの間で防共協定が結ばれたが、アルメニアとは合意に至らなかったこと、またイランと外交関係を樹立し大使の交換を行ったこと、北カフカース共和国に対して白軍との戦いを支援するために財政支援を行ったことなどが紹介されている。

第一一節ではアゼルバイジャンが赤軍に占領される直前の状況が述べられている。バクーで暴動を起こそうと画策していたボリシェヴィキの工作員が逮捕されたこと、危機に対応するために各政党の合意でハジンスキーに組閣が命じられたことなどが述べられている。

第一二節ではアゼルバイジャンの独立の結末について触れられている。アゼルバイジャンの独立を保全するという約束を信じて政府と国民議会はアゼルバイジャン共産党の最後通牒を受け入れたが、まもなく、赤軍によってバクーは占領され、約束が反故にされたと述べている。

第一三節では赤軍に占領された後、ゲンジェ、レンケ

ランなどアゼルバイジャン各地で暴動が起きたことが述べられている。最後の三節ではソヴィエト・アゼルバイジャンの政治や教育の現状について紹介している。

（3）本書の特徴

本書の特徴についても触れておきたい。まず、一読して気がつくのは非常にバランスのとれた記述がなされているということである。トルコの人々にアゼルバイジャンについて正確な知識を得てもらうことを意図して、レスールザーデは一九二二年にイスタンブルで『アゼルバイジャン共和国』という著書を記しているが、これは短期間に書かれたのであろう、無駄な記述も多く、文章もうまくまとまっておらず、いささか読みづらい感がある。

しかし、本書は政治、経済、文学、歴史、地理といった様々な分野にわたる情報をコンパクトにまとめることに成功している。また、本書と『アゼルバイジャン共和国』は内容的に重複している部分が多いということも指摘しておきたい。

また、経済分野や地理分野の説明において具体的な数字・データがあげられており、読者がイメージをつかみやすいように配慮されている。例えば、アゼルバイジャンの人口について説明するときに、全人口が三百万人であると述べるだけでなく、七〇％がトルコ人で、二〇％がアルメニア人であり、残りの一〇％がロシア人やユダヤ人であると説明し、さらに人口の七七％が都市に住み、二三％が村に住んでいるという具合である（p. 49）。

さらに、学説をふまえた説明がしばしばなされていることにも気づかされる。例えば、アゼルバイジャンの名前の由来について説明するときに、古代に実在した国「Atropetenye」に由来するというバルトリドの説を紹介している（p. 48）。また、アゼルバイジャン語の成立に関する説明では、モンゴル侵入の影響で東部のオグズ族が西方へ移動したことが西部のオグズ族の言葉を豊かにしたというFuad Köprülü の説を紹介している（p. 27）。

また、革命の混乱期にアルメニア人によって多数のアゼルバイジャン人が虐殺されたことが本書の中で繰り返し語られており、アルメニア人に対する彼の嫌悪感はすさまじいものがある。これは、同じ隣人であるグルジア人に対しては比較的好意的であるのとは対照的である。これは、レスールザーデに限らず、当時のアゼルバイジャン人民族主義者の間で一般にみられる傾向でもある。[28]

3．『あるトルコ人民族主義者のスターリンとの革命の回想録』[29]
(Bir Türk Milliyetçisinin Stalin'le İhtilal Hatıraları)

本書はレスールザーデがスターリンと関係を有していた一九〇五年頃から一九二二年頃の時期にかけてのスターリンとの思い出を綴ったものである。一九〇五年前後のバクーの革命運動やロシア革命後のモスクワの状況が生々しく記述されている。当初、アメリカで出版しようとしたが実現できず、トルコで発行されていた新聞『世界』(Dünya) に一九五四年に連載された。この著作は一九〇五年前後のバクーでの革命運動に関する前半部分と、一九二〇年頃から二年間軟禁状態で生活したモスクワでの体験を記した後半部分の二つに分けることができる。

本書は彼の著作のなかで唯一回想録の性格をもつものであり、レスールザーデの生涯をおさえるにあたって、紹介しないわけにはいかない。以下、本書の内容を紹介するとともに若干の考察を行うことにしたい。

(1) バクーでの活動

レスールザーデはスターリンと初めて対面したときの状況について次のように語っている。

バクー石油産業労働組合 (Baku Petrol Sanayii İşçileri Sendikası) という組織があった。もっぱら労働者の経済的利益に関心をもつこの正式な組織の背後では秘密裏に政治活動すら行われていた。秘密裏に活動していた反体制民族組織のメンバーであった私の叔父メフメット・アリーは上述した労働組合の書記であった。ある日、コバが我々と会いたいと連絡をよこした。

バクー郊外のバラハヌ地区の労働者宅の非常に質素な部屋で我々をやや背の高い線の細い男が迎えた。質素な身なりをしたこの男の醜いあばたづらを私は注視した。ぎこちない笑いを浮かべていた。我々を開放的に応対した。グルジア訛りが強く感じられるロシア語で話していた。[30]

レスールザーデが会ったこの男こそ、当時ザカフカースでコバと呼ばれていたスターリンである。この記述か

ら分かるように、主にアゼルバイジャン人労働者から構成されていると思われるバクー石油産業労働組合なる組織の背後にはボリシェヴィキが存在した。ボリシェヴィキがこの組織を実質的に支配し、バクーの石油産業労働者の間に社会主義思想を浸透させようとしていたのである。この活動をより実効的なものにしようとメフメット・アリーを介してレスールザーデに接触してきたのであろう。

また、各反体制組織の代表者たちによる集会もたびたび召集されていたようで、ボリシェヴィキやメンシェヴィキの代表者らと並んで、『発展』（Tekamül）紙の代表としてレスールザーデも参加している。このように、当時、レスールザーデは社会主義運動家たちと頻繁に接触していた。こういったことが、後に彼がモスクワに行ってから多様な人物と会い、また様々な誘惑をうける要因となった。この点については後述する。

（2）モスクワでの生活

モスクワでの彼の生活はかなり苦しかったようである。労働者手帳（İşçi Defteri）なるものが手渡され、これによって昼食はスープにありつけることができたが、彼がバクーの留置所で支給されていたスープと大差のないひどいものだった。また、朝食と夕食は自力で工面しなければならず、たまにもらえる配給や闇市を利用して飢えをしのいでいた。また、彼はモスクワに来た当初は定職に就くことができず、図書館に毎日通ってはアゼルバイジャンの歴史などに関する研究に没頭し、空腹を忘れさせようとしていた。

しかし、間もなく、タタール人の旧友イスメットの紹介で東洋諸言語研究所（Şark Dilleri Enstitüsü）にペルシア語とトルコ語のスタッフとして職を得ることができた。また、バクーからやって来た友人のアッバース・クルが民族問題人民委員部に職を得たことで、もう一人の友人メフメット・アリーと三人で民族問題人民委員部が所轄する住宅に住むことができた。これによって、モスクワでのレスールザーデの生活はようやく安定したものとなったが、共産党関係者からの度重なる誘惑に悩まされ続けた。

例えば、新たに形成される東洋学を扱う組織の代表になるよう民族問題人民委員代理であったブロイドに要請されている。この組織はロシアの著名な東洋学者たちをその構成員に招くことを予定しており、このことから当

時、モスクワで東洋学に関するレスールザーデの学識が高く評価されていたことが分かる。しかし、彼はこの組織の約款の中に構成員の五一パーセント以上が共産党員でなければならないという条文をみつけて、この申し出を断った。

ある時には、東洋諸民族共産党員養成大学（Şark Milletleri Komünist Üniversitesi）の教授に就くように求められている。これは、この大学で学ぶバクー、ゲンジェ、タブリーズ出身の三名の学生が彼の元を訪れ、空席であった「東洋諸地域における革命運動」の講義を担当する教授に就くよう要請されたのである。しかし、この要請についても「ミュサヴァト党員である自分が話す講義を学生たちは信頼して聴いてくれない」というもっともらしい理由で断っている。

また、スターリンの推薦をうけた外務人民委員部の職員がやって来て、訪ソするアフガニスタン外交団歓迎レセプションでペルシア語の通訳を務めるよう依頼されたこともあった。しかし、これについても直前に逃亡することでこの役目から逃れている。

このように、共産党関係者からのレスールザーデに対する協力要請は数多くあった。このことから分かるように、バクーで死刑が確定していたレスールザーデをスターリンが解放し、モスクワに連れてきたのは彼の東洋諸地域に関する学識や語学力を利用しようと考えていたからである。しかし、話はそう単純ではないようである。レスールザーデはある日、スターリンとオルジョニキッゼと会食をした帰りタタール人共産党員スルタン・ガリエフに出会っている。込み入った話があるということで翌日スルタンガリエフはレスールザーデの元を訪れている。そのときに交わされた会話は大変興味深い。

――ナリマノフ（当時、アゼルバイジャン社会主義ソヴィエト共和国人民委員会議議長）に代わってあなたを据えるというのは本当ですか？

――そんなわけがない。この話の出所はどこですか？

――クレムリン周辺でこのように人々が話しています。

――気は確かですか？　こんな噂話を信じるなんて。ナリマノフ博士の代わりにミュサヴァト党員のレスールザーデを据えるなんてありえないでしょう？[31]

レスールザーデはスルタンガリエフが簡単にこの話を信じたことを笑い話にしながら、この噂が何か特別の意図があって流布されたと説明している。しかし、後で以前スターリンとカリーニンとの間で交わされた会話を思い出し、この噂と結びつけて考えている。これは、彼がスターリンと会食しているときに、たまたまカリーニンが姿を見せ、そのときに交わされたものである。

――カリーニン同志、（イラン・）アゼルバイジャンを（カフカス・）アゼルバイジャンに統合させることに賛成ですか？

――いやいや、私は賛成ではない。(32)

この会話は当時、カフカース・アゼルバイジャンと同様にイラン・アゼルバイジャンもソヴィエト化しようとする計画が共産党幹部の間で議論されていたことをあらわしている。しかも、当時、国家元首に相当する全ロシア中央執行委員会議長にあったカリーニンと民族問題人民委員のスターリンとの間でこのような会話が交わされていたことの意味は大きい。

スターリンのイランに対する関心はどうだったのであ

ろうか。これについてはバクーからモスクワに向かう列車の中でレスールザーデとスターリンとの間で交わされた会話が参考になる。レスールザーデが一九一一年、立憲期のイランからイスタンブルへ行き、そこで立憲革命に関する情報を文章にまとめ、その一部は出版したが、まだ出版されていないものもあるという話をした。すると、スターリンは強い関心を示し、すぐにメフメット・アリーをバクーに遣わしてその資料を持ってきてほしいとまで言っている。

しかし、話題がイランのソヴィエト化のことに及ぶと、彼の姿勢は一貫していない。レスールザーデを救出するためにバクーにやって来たスターリンは現地のボリシェヴィキがイランをソヴィエト化しようとギーラーン州に攻勢をかけていることを知ると、それを中止させている。その理由をイランには共和制は根付かず、立憲君主制を根付かせることすら大変進歩的なことであると説明している。彼のこの説明を文字通り受け取れば、少なくとも一九二〇年の段階ではスターリンはイラン・アゼルバイジャンのソヴィエト化には消極的であったということになる。

しかし、スルタンガリエフが民族問題人民委員部でス

ターリンの下で働いていたこと、またスターリンとカリーニンの会話、さらにモスクワで共産党関係者が幾度となくレスールザーデに協力要請をしていたことなどを考えあわせれば、ナリマノフの代わりにレスールザーデを据えるという噂を一笑に付すことはできないと思われる。ペルシア語に堪能であるばかりでなく、イラン立憲革命を現地でつぶさに観察し、ナリマノフよりもはるかにイラン情勢に通じているレスールザーデは利用価値が極めて大きいからである。

これ以上、共産党からの要請を断り続けられないと考えたレスールザーデは友人の勧めもあり、先述したように、タタール人ネットワークを利用して国外に逃亡していくことになる。

むすびにかえて

本稿ではメフメット・エミーン・レスールザーデの生涯について概観するとともに彼の主要な著作について内容紹介を行った。これらの作業から分かるように、レスールザーデはある時にはジャーナリストであり、また政治家であり、時には学者であるというように多才な人物であった。これは晩年にいたるまでその精力的な執筆活動が衰えることのなかったことによくあらわれている。

本稿では考察することができなかったが、社会主義系組織ヒュンメトで活動を行っていたレスールザーデが後に民族主義政党であるミュサヴァトに加入するという思想転向についてその理由を明らかにすることは今後の重要な課題の一つであろう。

本稿の第Ⅰ章では彼の生涯を意識的に①社会主義運動期、②民族主義運動期、③祖国解放運動期の三つの時期に区分して紹介を行った。彼の思想転向を考察するためにも①の時期について綿密な考察を行うことが必要である。そのためにはヒュンメトが発行していた機関誌『ヒュンメト』にレスールザーデが執筆した論文を分析することが重要であるが、残念ながらこの雑誌の所在は現在でもなお確認されていない。したがって、ヒュンメトの初期活動を明らかにすることは難しい。しかし、幸いなことにこの時期、レスールザーデは様々な新聞や雑誌にかかわり、精力的に執筆活動を行っている。今後、これらの著作を丹念に分析することが必要であろう。

ところで、これまでアゼルバイジャン近代史は主としてボリシェヴィキの観点から描かれてきた感がある。また、非ボリシェヴィキのアゼルバイジャン知識人に注目

する場合でもオスマン朝に活動基盤を移したアフメット・アーオウルやヒュセインザーデ・アリーといった人物ばかりが注目されてきた感は否めない。一九九一年にソ連が崩壊しアゼルバイジャンが独立した今、民族主義運動において重要な役割を果たしたレスールザーデのような人物に注目し、アゼルバイジャン近代史を再検討する必要があるように思われる。

註

（1）Fahri Sakal, *Ağaoğlu Ahmed Bey*, Ankara, 1999, p. 69.

（2）Hostler, Ch. W. *Turkism and Soviets*, London, 1954, pp. 215-17.

（3）Hüseyin Baykara, "M. E. Resulzade Hakkında Birkaç Söz", *Azerbaycan Aylık Kültür Dergisi*, 12(60), p. 4.

（4）Şimşir, S. *Mehmet Emin Resulzade'nin Türkiye'deki Hayatı, Faaliyetleri, ve Düşünceleri*, Ankara, 1995.

（5）本章を執筆するにあたって主に依拠したのは次の二つである。①レスールザーデ著『アゼルバイジャン共和国』を校訂したY. Akpınarによるレスールザーデに関する伝記的説明の箇所（M. E. Resulzade, *Azerbaycan Cumhuriyeti*, eds. Y. Akpınar, İ. M. Yıldırım and S. Çağın, İstanbul, 1990, pp. IX-XXIV. 以下、Resulzade, *Azerbaycan*と略）と②トルコ滞在期を中心にレスールザーデの研究を行ったŞimşirがレスールザーデの生涯を紹介した箇所（S. Şimşir, *Mehmet Emin Resulzade'nin Türkiye'deki Hayatı, Faaliyeti ve düşünceleri*, Ankara, 1995, pp. 5-38.）である。

（6）Mangol Bayat, *Iran's First Revolution : Shi'ism and the Constitutional Revolution of 1905-1909*, New York, 1991, p. 87.

（7）その一例として『指針』（İrşad）紙をあげることができる。同紙は一九〇五年、バクーでアフメット・アーオウルによって創刊されたが、一九〇七年に休刊する。一九〇八年六月に再刊し、同年の四六号から七七号まではレスールザーデとともに発行された。同紙は一時ヒュンメトの影響下にあったらしい。また、一九〇六年にはアーオウルによってイランで同名のペルシア語紙が発行された（Sakal, *op. cit.*, pp. 68-69.）。

（8）その一例としてスターリンに依頼されて青年トルコ人革命を分析した論文をロシア語誌『警鐘』（Gudok）に寄稿したことをあげることができる。レスールザーデはこの革命をブルジョア革命だとみなしていた（M. E. Resulzade, *Bir Türk Milliyetçisinin Stalin'le İhtilal Hatıraları*, ed. S. Şimşir, İstanbul, 1997, pp. 20-21.）。

（9）Tadeusz Swietochowski, *Russian Azerbaycan 1905-1920 : The Shaping of National Identity in a Muslim Community*, Cambridge, 1985, p. 55.

（10）資本家ムルタザ・ムフタロフの支援をうけてアフメット・アーオウルによって一九〇八年に創刊された。三五〇〇部の部数を誇った。一九〇九年にアーオウルがトルコへ行くと、ユゼイル・ハジュベイリとジェイフン・ハ

ジュベイリに編集が引き継がれた。一九〇九年一一月、ロシア当局の圧力によって廃刊になった（Nadir Devlet, *Rusya Türklerinin Milli Mücadele Tarihi*（*1905-1917*）, Ankara, 1999, pp. 195-96）。

(11) 例えば、黒田卓やJ. Afaryは一九〇九年、S. Şimşirは一九〇八年としている（黒田卓「新聞のなかのイラン立憲革命」『岩波講座世界歴史23 アジアとヨーロッパ』岩波書店、一九九九年、一〇六頁；J. Afary, *The Iranian Constitutional Revolution 1905-1911*, New York, 1996, p. 275；S. Şimşir, *op. cit.*, p. 8）。

(12) Mehmetzadeはこの内容を「広範な人々を互いに結び付ける二つの節がある。それは言語の節と宗教の節である。言語の一体性が世界で確立していることに疑いはない。そして、これからも続くだろう。なぜならば短期間で変化することはないからである。しかしながら、後者はそうではない。一言語のみを話す民族をみても、千年という期間において言語の一体性を形成する民族を解体させることなく、宗教は二度、三度替わるのである。」というように説明している（Mirza Bala Mehmetzade, "Resul Zade Mehmed Emin 70 Yaşında", *Birleşik Kafkasya*, 1/3（30/32）, p. 12（以下、Mehmetzade, *Resul Zade* と略））。

(13) S. Şimşir, *op. cit.*, p. 14

(14) M. E. Resulzade, *Nizami*, Ankara, 1951.

(15) レスールザーデがイスタンブルに滞在中の一九一二年に雑誌『正しい道』にミュサヴァト党の声明が掲載されたことはイスタンブルのレスールザーデとバクーにいる同志との間でやりとりがあったことを表している（Mirza Bala Mehmetzade, *Milli Azerbaycan Hareketi*, *Ankara*, 1991（rep.）, p. 39）。

(16) メフメットザーデはこの時期のジャーナリズムと言語の関係について言語を①オスマントルコ語（Osmanlı Türkçesi）②書き言葉としてのアゼルバイジャン語（edebi Azeri Türkçesi）③地方の方言（mahalli şive, yerli şive）④口語（ağız）の四つに分類し、アゼルバイジャンのジャーナリズム界では②が中心であったが、『シェラーレ』誌は①、『モッラー・ナスレッディーン』誌は③を採用していたとしている（Mehmetzade, *Resul Zade*, p. 13）。

(17) Mehmetzade, *Resul Zade*, pp. 13-14.

(18) この大会では広大なロシア領内のムスリムの多様性を考慮して各々の自治を主張する連邦主義者と中央行政組織を創設して全ロシア・ムスリムの一体性を求める統一主義者との対立があった。ロシア領内に拡散し特定の地域に稠密していないタタール人代表者らが後者で、アゼルバイジャン、クリミア、中央アジアの代表者らが前者であった（N. Hablemitoğlu, *Çarlık Rusyası'nda Türk Kongreleri*（*1905-1917*）, Ankara, 1997, pp. 92-95；山内昌之『イスラムとロシア―その後のスルタンガリエフ』東京大学出版会、一九九五、八九―九二頁）。

(19) Mehmetzade, *Resul Zade*, p. 16.

(20) ドイツがクル川以北の東カフカースのロシアによる領有を認める見返りに、ロシアがドイツにバクーの油田に

関する特権を認めたブレスト＝リトフスク条約の附則条項のこと（Resulzade, *Azerbaycan*, p. 52）。

（21）井筒俊彦が司馬遼太郎との対談の中でアラビア語を教わった人物として紹介しているムーサー・ジャールッラーハという人物とこの Musa Carullah Begiyev は同一人物であると思われる（『井筒俊彦著作集　別巻』中央公論社、一九九三年、三七六頁）。

（22）Zeki Velidi Togan, *Hatıralar*, Ankara, 1999 (rep.), p. 515.

（23）本稿では次を参照した。Mehmed Emin Resulzade, *İran Türkleri : Türk Yurdu ve Sebilürreşad'daki Yazıları*, eds. Y. Akpınar, İ. M. Yıldırım and S. Çağın, İstanbul, 1993（以下、Resulzade, *İran* と略）。なお、本稿でこの論文の典拠にあたってあげた頁数は『トルコ人の母国』誌ではなく、この書中の頁数であることを断っておく。

（24）Resulzade, *İran*, p. 7.

（25）レスールザーデはこの三人の先駆者としてアフガーニーの名を挙げている。なお、レスールザーデは註の中でアフガーニーの Esed-abad というニスバから彼をハマダーンのトルコ系の人々が居住する村の出身であるとし、彼をトルコ系だと主張している（Resulzade, *İran*, pp. 24-25）。

（26）本稿では次を参照した。Mehmed Emin Resulzade, *Kafkasya Türkleri*, eds. Y. Akpınar, İ. M. Yıldırım and S. Çağın, İstanbul, 1993.

（27）この点について詳しくは Hüseyin Baykara, *Azerbaycan İstiklal Mücadelesi Tarihi*, İstanbul, 1975, pp. 34-37.

（28）例えば、Naki Keykurun, *Azerbaycan İstiklal Mücadelesinin Hatıraları*, Ankara, 1998 (rep.), pp. 171-174

（29）本稿では次を参照した。M. E. Resulzade, *Bir Türk Milliyetçisinin Stalin'le İhtilal Hatıraları*, ed. S. Şimşir, İstanbul, 1997.（以下、Resulzade, *Stalin* と略）なお、本稿でこの論文の典拠にあたってあげた頁数はこの書中の頁数であることを断っておく。

（30）Resulzade, *Stalin*, p. 17

（31）Resulzade, *Stalin*, p. 92

（32）Resulzade, *Stalin*, p. 90